短 報

細胞診にて子宮内膜症と診断し得た鼠径部腫瘍
の1症例信州大学医学部臨床検査医学教室¹⁾, 健保岡谷塩嶺病院検査部²⁾石井 恵子¹⁾ 鈴木 義孝²⁾

I. はじめに

子宮内膜が子宮以外の場所で増殖する外子宮内膜症は、子宮内膜とは連続していない卵巣、ダグラス窩、直腸、S状結腸、卵管、膀胱、膣などに発生することが知られている。

最近、子宮内膜が抗ケラタン硫酸抗体にて、腺組織としては特異的に染まることが証明された¹⁾。今回われわれは、抗ケラタン硫酸抗体染色を加えた細胞診にて、外子宮内膜症と診断し得た鼠径部腫瘍の1例を経験したので報告する。

II. 症 例

患 者：43歳，女性

既往歴：平成2年十二指腸潰瘍による鉄欠乏性貧血にて加療を受ける

現病歴：平成3年より，以前からあった右鼠径部腫瘍がときどき痛むため，平成5年5月24日岡谷塩嶺病院外科を受診。腫瘍は母指頭大で可動性良好。吸引細胞診にて，紡錘状の間葉系細胞とともに異型の乏しい腺上皮細胞集団を認めた。癌の転移は考えにくく，問診にて，痛みは生理中に増強し，生理が終わると改

善傾向があるとの情報を得たため，外子宮内膜症を疑い，抗ケラタン硫酸抗体による免疫染色を施行。上皮細胞集団に陽性像を認めた（写真1）。以上より，外子宮内膜症と診断し，同年6月4日腫瘍摘出術を施

写真1 吸引細胞診。抗ケラタン硫酸抗体陽性の異型のない上皮細胞集団（×100）

写真2 摘出材料の組織像

a：子宮内膜様の腺構造を認める

b：抗ケラタン硫酸抗体にて，内腔側を中心に陽性像を認める（×25）

A case of inguinal endometriosis diagnosed by aspiration cytology

Keiko ISHII¹⁾, Yoshitaka SUZUKI²⁾, C.T.

¹⁾Department of Laboratory Medicine, Shinshu University School of Medicine

²⁾Department of Clinical Laboratory, Okaya Enrei Hospital
論文別刷請求先 ☎ 390 長野県松本市旭3の1の1 信州大学医学部臨床検査医学教室 石井恵子

平成6年5月27日受付

平成6年9月9日受理

行。

手術所見：右鼠径部皮下の子宮円索内に、周囲の脂肪組織と癒着する腫瘤を認めた。

組織所見：脂肪組織中に、間質(endometrial stroma)の脱落膜反応、小出血を伴った分泌期内膜が点在して認められた。この異所性内膜島周囲は線維性で、全体として母指頭大の病巣を形成していた。点在する異所性内膜上皮に抗ケラタン硫酸抗体にて陽性像(写真2)が得られた。

月経歴：5月7日～14日(5月24日吸引細胞診施行。6月4日摘出術施行；分泌期後期であり、組織像に一致)6月6日～13日

III. 考 察

子宮内膜症の病因は ① 移植によるもの、② 体腔上皮化生によるもの、③ リンパ行性あるいは血行性播種によるものなどがあり、エストロゲンの関与が考

えられている。本症は決して珍しい病気ではないが、細胞診にて子宮内膜症と診断する機会には頻度的にはそう多くないと思われる。今回のように本来上皮細胞が存在しない場所から上皮細胞がとられた場合、まず第一に癌の転移浸潤の可能性を考えさせる。しかし、その細胞に異型性が乏しい場合はほかの可能性も考えなければならない。女性であれば子宮内膜症がその一つにあげられる。この場合、問診で月経との関連などを聞き出せば診断の大きな助けとなり得るが、そのような情報がない場合でも、抗ケラタン硫酸抗体による免疫染色が有用で、細胞診での診断が可能と思われた。

文 献

- 1) 塩沢丹里：ヒト子宮内膜および子宮内膜癌組織の複合糖質に関する組織化学的研究，信州医誌，38(1)：89～106，1990。